

野球から学ぶ人材育成と地方創生 筋書きのないドラマの舞台が進化発展

空条 円
Madoka Kujo

球春到来の三月。日本のプロ野球セ・パ両リーグのレギュラーシーズンが二十八日に開幕する。その一日前には米・大リーグが六年ぶりに日本で公式戦を開催。開幕シリーズとし、大谷翔平、山本由伸らが所属するドジャースと今永昇太、鈴木誠也のカブスが東京ドームで激突し、日本人選手らの活躍が期待される。甲子園球場でも春の選抜高校野球大会が開幕し、出場三二校が優勝を目指す。

この一年のスポーツ界を振り返ると、野球のニュースがひとときわ目立った年だったように感じる。米・大リーグでは、ドジャースの大谷

選手が打者に専念したレギュラーシーズンで史上初の「ホームラン五〇本、五〇盗塁」を達成。チームもワールドシリーズ制覇を果たし、世界中の野球ファンを熱狂させた。昨秋に行われた野球の国際大会「プレミア12」で連覇を目指した日本代表は強豪国らとの激戦を勝ち抜き、決勝ではアジアのライバル・台湾に惜しくも敗れた。

国内ではプロ野球のクライマックスシリーズ(CS)に進出したセ・リーグ三位の横浜DeNAベイスターズが下克上を果たし、日本シリーズでパ・リーグ一位の福岡ソフトバンクホークスを破り、二六年ぶ

りの日本一に輝いた。シーズン三季から頂点に立ったチームは二〇二〇年の千葉ロッテマリーンズ以来二回目。手に汗を握る劇的なゲームが展開された。

球場を核にまちづくり

筋書きのないドラマの舞台となる球場に目を向けると、阪神甲子園球場が昨年八月に開場百周年を迎えた。プロ野球・阪神タイガースのホームグラウンドであり、高校野球の聖地としても数々の記憶に残る熱戦のドラマが繰り広げられてきた。長い歴史のなかで継続的に改修

が重ねられ、最も大規模だったものが二〇〇七年十月から二〇一〇年三月まで三期に分けて行われたリニューアル工事。耐震補強や内外装改修、甲子園の名物である内野席の一部を覆う大屋根「銀傘」の架け替えや外壁に植生されたツタの植え替えなどが実施された。

今夏の全国高校野球選手権大会の開会式は、日中の猛暑を避けて八月五日の午後四時に行われる。夕方の開会式は大会史上初めて。暑さ対策として午前と午後に分けて二部制は、昨年よりも導入を増やすという。甲子園球場を運営する阪神電気鉄道は銀傘を高校の応援

団が集まるアルプス席まで拡張する計画を進めており、観客の暑さを和らげる熱中症対策にも率先して取り組む方針だ。大屋根は戦前まで「大鉄傘」という呼び名でアルプス

席まで覆われていた。戦中に軍への金属供出のためすべて取り外されたが、戦後に銀傘として復活した。銀傘拡張を含め一連の改修は次の一〇〇年に向け新たな価値を創造し、多くの人たちに愛される日本最古の本格的な球場としての歴史と伝統を紡ぐ意味合いがある。

スポーツやイベントなどで人々が集まり、熱狂するスタジアムは、地域活性化のまちづくりでも大きな役割を担う。三月で開業二周年を迎えるプロ野球・北海道日本ハムファイターズの新球場「エスコンフィールドHOKKAIDO」。「毎日オープンしているボールパーク」として試合のない日も営業し、賑わいの拠点として地域のまちづくりにも貢献。ホテルやサウナ、レストランだけでなく、球場ツアーやサマーキャンプ、冬の雪上体験など多種多様なイベントも楽しみに来場する人は

多いという。

周辺には広大な開発用地も残り、当面は大学や病院などの建設が予定される。新球場を中心とした北海道ボールパークFビレッジの年間来場者数は二〇二三年が三四六・四万人、二〇二四年は四一八・七万人だった。札幌や新千歳空港とアクセスする鉄道の最寄り駅が開業する二〇二八年には七〇〇万人を目指すとしている。

昨春に再開発事業者が選定され、複合開発プロジェクトが本格的に始動した築地中央卸売市場跡地。提案内容によると、約五万人収容の全天候・超多機能型スタジアムやMICE施設などを建設する。エスコンフィールドと共通するのはスタジアムを核としたまちづくり。食のまちがどう進化するのか楽しみが尽きない。

厳しい道を選ぶ強い意志

昨年は日本のプロ野球誕生から九〇年の節目の年でもあった。日本のプロ野球は長きにわたって一

が強かったが、アベレージヒッターの野手として海を渡り、新たな道を切り拓いてきた。

自らを成長させるため、選手時代から日々の生活を含めてストイックな人で知られるイチローさんは引退後もトレーニングを欠かしていないという。米・殿堂入りでの記者会見で殿堂ユニホームを着る際に見せた現役時代と変わらぬ体形には驚かされた。多くのメディアがその偉業をたたえ、イチローさんのコメントを報じるなか、メンタル面の鍛え方についても言及していた。

楽な方に行くとなるとメンタルは弱くなり、体も怠けて駄目になる。いかに厳しい道を選ぶことができるか。

その言葉には自ら実践し、体現してきた重みがある。これから新年度を迎え、建設業界も前途有望な若者たちを迎えることになる。次代を担う人材として成長するには、誰もが生き生きと働き、活躍できる職場環境のほか、安易に楽な方に逃げず、厳しい道を進み続ける強い意志を持つことも必要だろう。